OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	地図製作計画における日本語の後置文
Author(s)	三原, 健一
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54493
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

地図製作計画における日本語の後置文

三原　健一

１．はじめに

本稿は、地図製作計画（Cartography Project）と呼ばれる句構造理論を援用し、日本語後置文の正確な姿を探る試みである。[1]

日本語は厳密な主要部後置型言語であり、述語（及び、それに付加される助動詞や終助詞などの総体）が文末に置かれるのが無標の状態であるが、「ついに買ったぞ、家を」のように述語の後に要素が来る場合があり、このような文を後置文（right dislocation）と言う。後置要素としては(1)のように多様なものが可能である。[2] 後置要素は所定の位置に戻すことが出来るのが普通で、例えば(1a)であれば「今朝、直人が来たんだよ」のようになるが、(1f)のように、所定の位置に項（「山田は」）が生じているために戻せない場合もある。

(1) a. 今朝、来たんだよ、直人が。（主語）
　　b. あいつが先に殴ったんだぞ、僕の妹を。（目的語）
　　c. 本当に実験に成功したんです、この方法で。（付加詞）
　　d. 入っていったんです、不審な男が、あのビルに。（複数要素の後置）
　　e. 突然、大男が現れたんです、２メートルくらいの。（「の」格修飾句）
　　f. 山田は馬鹿だよ、あいつは本当に。（元に戻せない後置要素）
　　g. 私、心から後悔してるんです、学生時代に一生懸命勉強しなかったことを。（従属節）

後置文は基本語順に変更を加えた文タイプであるが、本稿では、「語順を変更する規則には必ず談話（discourse）上の理由がある」という命題を指導原理として分析を試みる。

次に、地図製作計画とは、談話構造あるいは語用論に関わる情報も句構造上で示そうとする理論的枠組みである。具体的には、従来「CP」で括られていた構造を、(2)の ForceP～FinP のように精密に細分化することになる。ひとことで言えば、CP 層（CP-layer）の「統語地図」を精密化しようとする計画である。(2)において、ForceP は平叙文や疑問文といった文タイプを決める範疇、Top(ic)P は指定部（(2)の点線部分）に主題句を擁する範疇、Foc(us)P はかき混ぜ句や WH 句など、焦点解釈を受ける要素を指定部に持つ範疇である。そして、TP 主要部の T 位置で決まるのは不定形（[-finite]）であり、定形時制（[+finite]）の決定は Fin(ite)P の仕事となる（三原 2015b）。[3]

(2) $[_{ForceP} \ldots [_{TopP} \ldots [_{FocP} \ldots [_{FinP} \ldots [_{TP} \ldots [_{(NegP)} \ldots [_{vP} \ldots [_{VP} \ldots V] v] (Neg)] T[-finite]] Fin[+finite]] Foc] Top] Force]$

精密化された CP 層部分は、文の左端に位置することから「左周辺部（left periphery）」

と呼ばれることが多い。本稿ではさらに、Belletti (2004)に倣って vP 部分も精密化する必要があることを主張し、(3)のような「下周辺部（low periphery）」の構造化も併せて提案したい（(3)は TP 以下の構造を示している）。

(3)　… [$_{TopP}$ … [$_{FocP}$ … [$_{AspP}$ … [$_{VoiceP}$ … [$_{VP}$ … V] Voice] Asp] Foc] Top]

(3)は、CP が ForceP～FinP に分解されたのと同様に、vP が TopP～VoiceP に区分される様子を示したものである。Asp(ect)P は「ている/てある/ておく」などのアスペクト要素を主要部 Asp に持つ範疇、VoiceP は受身（られ）や使役（させ）などを主要部 Voice に擁する範疇である（ただし、AspP/VoiceP は本稿の内容とは直接的に連動しないので、本稿では詳しく論じない）。また、下周辺部は、文タイプを決める仕事には関わらないので ForceP は存在せず、定形時制とも無関係であるから FinP も設定する必要はないと考える。

２．後置要素

日本語の後置文に関する古典的文献として久野(1978)がある。久野は、先行文脈や発話状況から復元可能（か補足的）な要素、つまり、情報的に最も重要でない要素が後置要素になるとした。つまり、談話中に既に現れており、予測可能な要素ということである。また(1f)でも既に見たが、(4)のように元に戻せない後置要素があることから、後置要素は、移動によって文末に後置されるのではなく、最初から文末位置に基底生成されると主張している（具体的な分析方法については第４節で紹介する）。

(4)　ちょっと、その本を見せて下さい、<u>その机の上にある本を</u>。

それに対して高見(1995)は、久野による上記の特徴づけは保持した上で、復元可能ではないので重要度は高いが、最も重要度が高いとは解釈されない要素が後置要素となるタイプもあることを指摘した。

(5)　太郎は花子に買ってやったよ、<u>10 カラットのダイアの指輪を</u>。

(5)における下線部は、新情報であるので談話中に既に現れている要素ではないが、「買ってやった」の部分をより重要な情報として先に提示した結果、(5)の後置文が生じるタイプと言えよう。

日本語の後置文に関する研究では、上で瞥見した久野・高見の見解が定説とされてきたと言えよう。まとめて言えば、「最も重要な情報を担う要素は後置要素にならない」という見解である。ところが、藤井(1991)に驚愕すべき指摘がある。

藤井(1991)は後置文を次の３タイプに区分した。(6a)が久野タイプ、(6b)が高見タイプ、そして(6c)が、藤井が新たに設定したものである。藤井の名称と共に示しておこう（ただし、藤井による(6c)の説明は多少分かり難いので、筆者の説明で示す）。

(6) a.　付加文：重要度の低い要素を後置するタイプ

b.　有標文：述語の方が「より重要」と判断し、述語を先に言うことによって後置

文が生じるタイプ

c. 修正文：情報的に最も重要な要素が後置されるタイプ

(6c)は、これまで指摘されてこなかったタイプで、いわば、焦点要素が後置されるタイプと言えよう。そして、驚愕するのはその生起比率である。収集した実例の中でそれぞれのタイプが占める比率を見て欲しい。

(7) a. 付加文：24.85%

b. 有標文：36.64%

c. 修正文：38.51%

つまり、従来言われてきたことに反し、最も重要度の高い焦点要素が後置されるタイプが全体の 40%近くを占めるということである。このように、藤井(1991)は極めて重要な指摘を行っているのだが、残念なことに、提示されている例文が前後の文脈を含まないものであるので、次節で筆者の収集した談話付きの実例を示すことにしたい。

３．談話主題、弱焦点、強焦点

当節では以下、東海林さだお（「東」と略記）と赤瀬川原平（「赤」と略記）の２人が、毎回ゲストを１人加えて鼎談している『老化で遊ぼう』から収集した実例を見る。

前節で紹介した藤井(1991)による後置文の３類型は、談話構造の観点から言い換えれば(8)-(10)のようになろう。それぞれの文例と共に示す（[　　]内は藤井 1991 の名称）。

(8) 談話主題（Discourse Topic）[付加文]

（阿川佐和子）東海林さんはどうなんですか。ゴールは見えてる？

（東）死のゴールより、むしろ仕事のゴールの方が大きく見えてるね。

（赤）それ、東海林さんは盛んに言うんですよ、仕事が来なくなることが不安だって。

ここで、（赤）の発言における後置要素「仕事が来なくなることが不安だって」は、直前にある（東）の「仕事のゴール」を受けており、かつ、「それ」が明確に「仕事のゴール（の方が大きく見えてる）」を指しているので、談話主題であることが明らかである。

次に(9)において、（阿川）は、どのようなイブニングドレスかを聞き手に伝える意図を持っていると思われるが（従って焦点なのであるが）、「人魚のようなイブニングドレスをお召しになっていらしたことがあるんです」という述語を中心とする部分を先に伝えたいために、結果として弱焦点が後置された文になっていると考えられる。

(9) 弱焦点（Weak Focus）[有標文]

（阿川）だって、あるパーティに、女優の川島なおみさんが人魚のようなイブニングドレスをお召しになっていらしたことがあるんです、もうピチピチにボディにはりついて、お尻の形が完全にわかって、裾がちょっと広がっているよう

な。

そして最後に(10)では、２回目の（藤森）の発言において「毛がズルッと取れる」の部分まで聞くと、聞き手は「ひねったニワトリ」の話をしていると思うだろう。しかし、最後まで聞くと「生きているニワトリ」のことを話していることが分かる。従って、「歩いているニワトリでも」は、談話の流れからは予測できない強焦点である。

(10)　強焦点（Strong Focus）

（藤森輝信）ニワトリは死んでしまうと血が抜けないから、ひねるのはよくないってさ、逆さに吊るして首を切って血を抜いた。

（東）僕らは、先にひねってから、血を抜いて、熱湯につけて毛を抜く。

（藤森）あれはなかなか神秘的ですよね。ニワトリにお湯をかけると、毛がズルッと取れる、歩いているニワトリでも。

（赤）歩いてるニワトリに熱湯かけたわけね（笑）。

このように、藤井(1991)の３類型は実例からも確認することができる。では、この３タイプの後置文における後置要素の解釈（談話主題・弱焦点・強焦点）の違いは、どのように統語構造に反映されるのだろうか。また、３種の後置要素は、移動によって派生するのか、それとも基底生成されるのだろうか。次節でこれらの問題について考えよう。

４．後置要素の生成

生成文法理論の枠組みにおける日本語後置文の研究は、まず、１文分析と２文分析に分かれ、それぞれがさらに細分化される。(11)は１文分析の方法を列挙したものである（以下、「α」は後置要素を示す。また、それぞれの分析において方法の細部が異なる場合もあるが、平均値的なものと理解されたい）。

１文分析

(11) a.　右方移動分析（Haraguchi 1973, Simon 1989）

$[[\dots t_i \dots]\ \alpha_i]$

b.　かき混ぜ＋残余移動分析（黒木 2006）

$[\alpha_i [\dots t_i \dots]] \rightarrow [\dots t_i \dots]_j [\alpha_i t_j]$

c.　基底生成分析（Soshi and Hagiwara 2004）

$[[\dots pro_i \dots]\ \alpha_i]$

右方移動分析は、後置要素を文字通り右方向に移動し、文末要素とするものである。次にかき混ぜ＋残余移動分析は、まずαを左方向にかき混ぜ、しかる後に、αの痕跡を含む構造を左方向に移動する（これを残余移動（remnant movement）と言う）分析である。本稿での分析は(11b)の方法が最も近い。そして基底生成分析は、移動を仮定せず、文中の空所をゼロ代名詞（pro）とするものである。

他方、2文分析は、派生の始発段階では2文からなる構造を作っておき、何らかの削除を施すことで1文を派生する方法である。

2文分析

(12) a. 繰り返し＋削除分析（久野 1978, 井上 1978, Endo 1996）

[S … pro_i …][S ~~¥~~ α_i ~~¥~~]

b. かき混ぜ＋Sluicing 分析（Abe 1996, Tanaka 2001, 綿貫 2006, Takita 2011, Yamashita 2011）

[S … pro_i …][S α_i ~~[S … t_i …]~~]

繰り返し＋削除分析は、2文からなる構造を繰り返して作っておき、第2文における α の前後の単語列（変項(variable)）を削除することによって、結果として α が後置要素となる分析である。そして、かき混ぜ＋Sluicing 分析は、2文を繰り返して作る点は(12a)と同じだが、第2文において α をいったんかき混ぜ、しかる後に、取り消し線で示す S を Sluicing と呼ばれる操作によって削除する分析である。

本稿は、それぞれの分析を比較対照することは目的としていないので、そのことについては黒木(2006)・Takita (2011)を参照していただきたい。以下、談話主題・弱焦点・強焦点の区分と、後置要素の移動生成・基底生成の別との関連を中心に論じることにしよう。

後置要素が移動により生成されるのか、それとも基底生成されるのかを決めるには、島（island）となる構造を作っておいて、島の中の空所と後置要素が同一対象を示すかどうかを調べればよい。同一対象を示せば、島の制約を受けていないこと、すなわち、移動ではなく基底生成されていることを示している。他方、同一対象を示さなければ、島の制約を受けていること、すなわち、移動によって生成されていることを示す。以下、後置要素の3タイプごとに検証することにしよう。

ただ、1つ注意しておくべきことがある。以下で示す議論は、文中に島を埋め込んだ構造を用いてなされている。つまり、文内空所と後置要素が遠く離れている構造を用いての議論である。このような構造で文内空所と後置要素の同一解釈を検証しようとする時、出来る限り同一解釈が得られやすい環境（意味的関連性の保証、語用論的推論の負担軽減、文脈の整備など）に配慮する必要がある。そのような配慮を施してもなお、話者によって文法性判断に揺れが生じる可能性は排除出来ない。

そのため、以下に示す例では、それぞれの例文番号の(a)に、話者間で判断が一致するであろうと思われる例を、そして(b)に、判断の揺れが大きいと予測される例を配置した（「e」は島の中の空所を示す）。もし、(b)はあまり良くないが、(a)は言えそうだという反応が得られれば、本稿の目的は半ば達成されたとして良いであろう。

(13) 談話主題

a. 君といつか行った居酒屋、魚が美味しかったよね。それで、もう一度行こうと思って、[駅から e 行く]道を思い出そうとしたんだけどね、あの居酒屋へ。

b. A: 田中さんが新刊を出しましたよね。あの第３章の後半、剽窃じゃないのかなあ。
B: ええ、実は私、[e 出した]出版社に問い合わせたんです、あの本を。

(14) 弱焦点
a. で、君は[e 富山に行く]計画を立てたんですか、北陸新幹線で。
b. 彼は[e 分かれた]恋人のことをまだ思っているようでしたか、親に猛反対されて。

(15) 強焦点
a. *彼は、前から食べるものには気を遣っていましたけど、先日会ったら、[e 気をつけるようになった]きっかけについて話してくれましたよ、食べる量も。
b. *先生は、[私が伊万里を e 焼きたくなった]きっかけをお尋ねになったんです、山ほど。

さて、談話主題と弱焦点は島の制約違反を示さないことから、いわゆる後置要素は基底生成されることが分かる。それに対して強焦点は、島の制約に抵触するので、移動により派生することになる。状況をまとめておこう（α は後置要素）。

(16) a. 談話主題＝基底生成：[[… pro_i …] α_i]
b. 弱焦点＝基底生成：[[… pro_i …] α_i]
c. 強焦点＝移動生成：[[… t_i …] α_i]

この結論は残留代名詞の可否によっても証明される（cf. 綿貫 2006）。[4]

残留代名詞（resumptive pronoun）とは、島をなす構造中にある空所を代名詞で顕現させたものであるが、移動生成の場合、痕跡はゼロ代名詞ではないので、残留代名詞を用いると非文となる。以下で見るように、談話主題・弱焦点を含む文では残留代名詞が可能であるので、後置要素の生成にあたって移動が生じていないことが分かる。

(17) a. 談話主題
[田中さんがあれを買った]店、どこだったかなあ、あのウサギの木彫りが付いたストラップ。
b. 弱焦点
あの、あなたは知らないだろうけど、[あの人がこんなことばかりする]生活、もうイヤなんです、競馬、競輪、ボート。

‘Right-Roof Constraint’（RRC; Ross 1967）と呼ばれる制約に関しても上と同じ結論が得られる。RRC とは、右方移動規則に関する制約で、右方移動される要素はその節内でのみ移動できる（つまり、その上位節の右端に移動することはできない）というものである。次の例を見られたい。

(18) a. John said that a picture of Madonna was on sale yesterday.
b. John said that [a picture was on sale yesterday of Madonna].

(18a)では、副詞 yesterday が従属節の時を修飾する読みと共に、主節の時を修飾する読みも可能である。それに対して、(18b)では yesterday が従属節の時を修飾する解釈のみが得られる。これは、(18b)では a picture を修飾する前置詞句 of Madonna を移動しているのだが、RRC により従属節（[　　]部分）の右端にしか移動できず、その結果、前置詞句の前にある yesterday が従属節の時のみを修飾することによる。

さて、先に示した例文(13)(14)において、後置要素が主節末に生じていることから、これらでは移動が生じていないこと（従って、文内空所は痕跡でないこと）が明らかである。それに対して(15)は、(13)(14)と同じ環境にあるにも拘わらず非文であるということは、RRC が発動している（文内空所は痕跡である）と解釈されよう。

５．地図製作計画と後置文

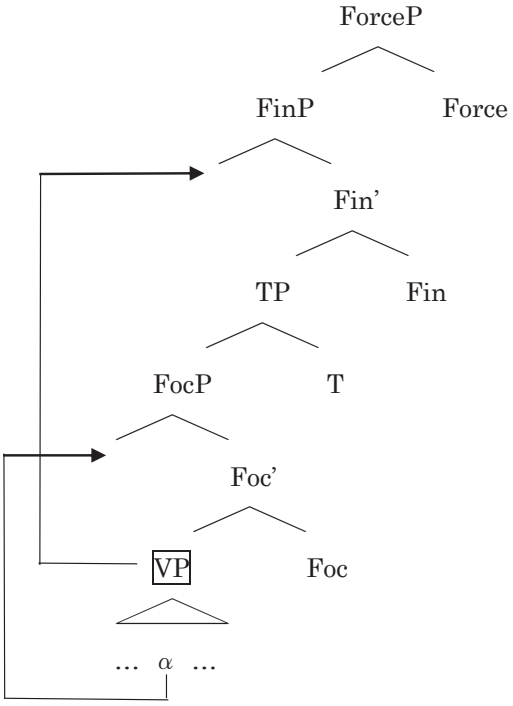
当節では、後置要素が(19)の下周辺部 (low periphery; Belletti 2004, 前田 2013) に生じ、さらに残余移動 (remnant movement) が適用されることにより後置文が生成されることを主張する。下周辺部については既に述べたが、以下で繰り返しておこう（(19)は TP 以下の構造を示している)。

(19) … [$_{TopP}$ … [$_{FocP}$ … [$_{AspP}$ … [$_{VoiceP}$ … [$_{VP}$ … V] Voice] Asp] Foc] Top]

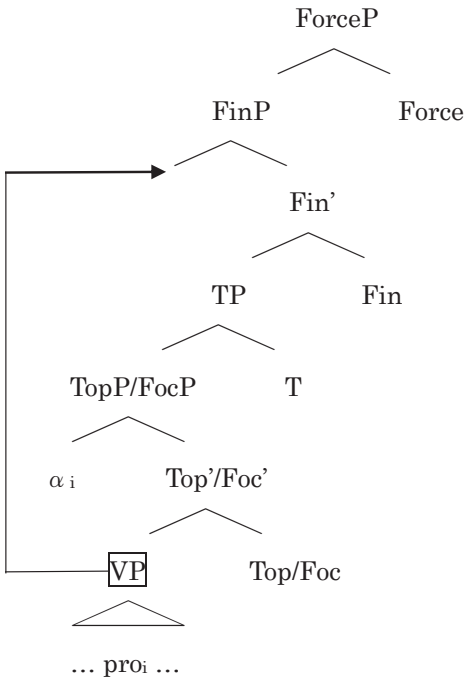
(19)は vP が TopP～VoiceP に区分される様子を示している。Asp(ect)P は「ている/てある/ておく」などのアスペクト要素を主要部 Asp に持つ範疇、VoiceP は受身（られ）や使役（させ）などを主要部 Voice に擁する範疇であった（AspP/VoiceP は本稿の内容とは連動しないので以下では省く)。[5]

(20)は強焦点を含む文の派生を示している。後に後置要素となる α は、VP 内から FocP 指定部に移動し、α の痕跡を含む VP が残余移動によって FinP 指定部に移動する。他方(21)は、談話主題及び弱焦点を含む文の派生方式を併せて示したものである。談話主題の場合、TopP 指定部に α が基底生成され、ゼロ代名詞 pro を内包する VP が残余移動によって FinP 指定部に移動する。一方、弱焦点の場合、FocP 指定部に α が基底生成され、ゼロ代名詞を含む VP が FinP 指定部に移動することになる。談話主題・弱焦点の双方において、VP は痕跡を含まない構造なので「残余移動」と言うのは正確ではないのだが、強焦点の場合に合わせてそう呼んでおく。３種の後置文において、いわゆる後置要素はまず「前置」されるのだが、残余移動の結果として「後置」要素となるのである。

(20)



(21)

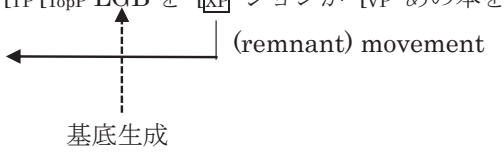


さて次に、Tanaka (2001)が‘Gapless Right Dislocation’と呼んでいる後置文について述べておくことにしよう。「無空所後置文」とは(22)のようなもので、後置要素が元あったと思われる箇所に音形を伴う要素が生じている文である。

(22)　ジョンがあの本を読んだよ、LGB を。

ここにおいて、「あの」という談話照応形が用いられていることから分かるように、後置要素は明らかに談話主題である。とすれば、このタイプは、(21)のうち TopP が生じる場合と同様に扱うことができよう。すなわち、「LGB を」(low) TopP の指定部に基底生成しておき、「あの本を」を含む XP を残余移動することになる。[6] XP からは何も摘出されていないので、ここで再び、「残余移動」と称するのは実を捉えていないことになるが、２頁前で書いたように便宜上の名称としておこう。(23)で派生方法を示す。

(23) … [TP [TopP LGB を [XP ジョンが [VP あの本を読んだよ]]]]。



６．結びにかえて

本稿で提示した「下周辺部」の構造は、日本語文法の様々な構文において現れるように思える。(24)のような構文がまず念頭に浮かぶ。

(24) a. 太郎は花子の言動を不審に思った。（認識動詞構文）

b. 太郎は花子を、思い切り右腕をつねった。（所有者上昇構文）

ここにおいて、「を」格表示を取る「花子の言動を」「花子を」は、(low) TopP 指定部に生じている可能性が高いと思われる（三原 1998、三原・平岩 2006）。

そのような中で、本稿の最後に、「太郎は手紙を花子に送った」のように、VP 内かき混ぜと呼ばれる操作が適用された構文を取り上げることにしよう。

が、その前に、中村(2011)の分析について見ておきたい。中村は、文頭に要素をかき混ぜたいわゆる単距離かき混ぜが適用されている文では、修正文脈が後続し難いという観察を行っている。

(25) a. 太郎はメジャーリーグのどこを応援しているの？　太郎はレッドソックスを応援している。でも、太郎はマリナーズも応援している。

b. 太郎はメジャーリーグのどこを応援しているの？　レッドソックスを、太郎は応援している。*でも、太郎はマリナーズも応援している。

(25a)は、「レッドソックスを」を目的語位置に留めた文であるが、「でも」以下の修正文脈を付けても何ら問題がない。ところが、「レッドソックスを」を文頭にかき混ぜた(25b)では、修正文脈の落ち着きが極めて悪い。これは、要素をかき混ぜることによって強い焦点解釈が強制され、それが、焦点解釈をキャンセルする修正文脈と衝突するからだと考えらえる。

このことを念頭に置いて VP 内かき混ぜの例を見よう。二重目的語構文の(26a)は、「間接目的語＋直接目的語」という基本語順が守られている文であるが、(26b)は、それに VP 内かき混ぜが適用され、語順が変更された文である。

(26) a. 授賞式会場で、哲也は美穂に花束をあげた。そして、誰にも分からないように、こっそりと、ダイヤの指輪もあげた。

b. 授賞式会場で、哲也は花束を美穂にあげた。??そして、誰にも分からないように、こっそりと、ダイヤの指輪もあげた。

(25a,b)ほど明確に文法性の対比が得られないが、VP 内かき混ぜが適用され焦点解釈が強制された(26b)は、修正文脈の併置が(26a)より不自然であるように感じられる。もしそうだとすると、VP 内かき混ぜによって前置される要素 α は、(27)での FocP 指定部に着地する可能性が高いと思われる。

(27) … [TP [TopP [FocP α_i [VP … t_i …

日本語のような主題卓立型言語においては特に、左周辺部のみならず、下周辺部も豊かな構造を有している可能性が非常に高いと思われる。この構造を経験的に立証していくことは緊急課題の１つに違いなく、今後とも引き続き追及していきたい。

註

1 本稿は、第 40 回関西言語学会記念大会（於神戸大学）におけるシンポジウム「これまでの言語学を振り返り、これからの言語学を考える」における口頭発表（三原 2015a）のうち、後置文に関する部分のみを取り出し、かつ、大幅な修正を加えたものである。シンポジウム司会者の影山太郎氏、及び、会場から指摘・質問をいただいた方々に感謝申し上げる。また、本稿は、高見健一氏との議論が出発点となっている。記して感謝したい。

2 第４節で、いわゆる後置要素には、元位置から文字通り後置されるものと、文末に基底生成されるものの２種があることを述べるので、「後置要素」と一括するのは事実に反することになるが、便宜上「後置要素」と称しておく。また、「後置する」という表現を用いる場合も、実際には文末に基底生成するものを含む便宜上の言い方と心得らえたい。

3 Rizzi (1997, 2004)ではさらに多くの範疇を擁する CP 層が設定されているが、(2)では、日本語後置文の分析にとって直接的に関わらない範疇を省いた。また、談話構造や語用論の情報を含む CP 層の構造は、例えば、主語卓立型言語・主題卓立型言語などの類型論的差異があることからも分かるように、言語によって異なり得ると考えられることも付記しておきたい。

4 残留代名詞を用いると、前の文脈との間に談話関連性が生じるため、文脈からは予測できない要素を後置する強焦点の例文は原理的に作成できない。

5 vP を TopP～VoiceP に分解すると、派生の始発段階では vP 指定部にあるとされる主語（動詞句内主語仮説）をどこに生成するかという問題が生じる。本稿ではこの問題に対する答えが与えられない。下周辺部を有する構造において、動詞句内主語をどこに配置するかは別途考えたい。

6 註５で記したように、動詞句内主語の位置については今後に期したいので、(23)では「XP」と表示しておくことにしたい。

参考文献

Abe, Jun (1999) On Directionality of Movement: A Case of Japanese Right Dislocation. Ms. Nagoya University.

Belletti, Adriana (2004) Aspects of the Low IP Area. In L. Rizzi (ed.) *The Structure of CP and IP*. Oxford University Press.

Endo, Yoshio (1996) Right Dislocation. *MIT Working Papers in Linguistics* 29.

藤井洋子(1991)「日本語文における語順の転換：談話語用論的視点からの分析」『言語研究』第 99 号.

Haraguchi, Shosuke (1973) Remarks on Right Dislocation in Japanese. Ms. MIT.

井上和子(1978)『日本語の文法規則』大修館書店.
久野暲(1978) 『談話の文法』大修館書店.
黒木暁人(2006)「日本語右方転移文の構造について：左方移動分析の観点から」*Scientific Approaches to Language* No.5. 神田外語大学.
前田雅子(2013)「日本語における Derivational Feature-based Relativized Minimality」遠藤喜雄（編）『世界に向けた日本語研究』開拓社.
三原健一(1998)『生成文法と比較統語論』くろしお出版.
三原健一(2015a)「生成文法の明日に架ける橋（Bridge over Troubled Water）」第 40 回関西言語学会記念大会シンポジウム（於神戸大学）における口頭発表.
三原健一(2015b)『日本語の活用現象』ひつじ書房.
三原健一・平岩健(2006)『新日本語の統語構造』松柏社.
中村浩一郎(2011)「トピックと焦点：「は」と「かき混ぜ要素」の構造と意味機能」長谷川信子（編）『70 年代生成文法再確認』開拓社.
Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*. Kluwer Academic Publishers.
Rizzi, Luigi (2004) Locality and Left Periphery. In A. Belletti (ed.) *Structures and Beyond*. Oxford University Press.
Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*. Ph.D. Dissertation. MIT.
Simon, Matsuko Endo (1989) *An Analysis of the Postposing Construction in Japanese*. Ph.D. Dissertation. University of Michigan.
Soshi, Takahiro and Hiroko Hagiwara (2004) Asymmetries in Linguistic Dependency: Linguistic and Psychological Studies of Japanese Right Dislocation. *English Linguistics* 21(2).
高見健一(1995)『機能的構文論における日英語比較』くろしお出版.
Takita, Kensuke (2011) Argument Ellipsis in Japanese Right Dislocation. *Japanese/Korean Linguistics* 18.
Tanaka, Hidekazu (2001) Right Dislocation as Scrambling. *Journal of Linguistics* 37(2).
綿貫啓子(2006)「日本語の後置文：左方移動文との相違」*Scientific Approaches to Language* No.5. 神田外語大学.
Yamashita, Hideaki (2011) An(other) Argument for the “Repetition” Analysis of Japanese Right Dislocation: Evidence from the Distribution of Thematic Topic-*wa*. *Japanese/Korean Linguistics* 18.